

時空を超えた「人間の安全保障」の視点を



ジャーナリスト(地球環境問題)  
幸田シャーマン

「情熱を持ってライフワークとして取り組めるテーマを見つけたい」 そんな思いから地球環境問題にかかわり始めた幸田シャーマンさんは、国内外の現場で「プラス」の変化を起こす人々に話を聞き、その言葉を広く伝える活動を続けてきた。その中で、暮らしを取り巻く環境の問題が人間の安全保障に直結すると気付いた彼女は、それを掘り下げる研究の道へと進む。

「どんな小さなことでも自分が役に立てると感じるが一番の幸せ」とほほ笑みを見せながら、「人間が絡む問題が複雑なのは当然。その複雑さに耐えて、取り組む力を養わなければ」と力説する彼女こそ、そのチャレンジの最前線に立つ一人だ。

(続きは55ページ)

## 「人間の複雑な問題に取り組む 忍耐と体力が必要です」

ジャーナリスト（地球環境問題）

### 幸田 チャーミン

Koda Charmine

1979年聖心女子大学英文科卒業。92年ハーバード大学ケネディ・スクール卒業、修士号取得。80年からNHK、フジテレビほかでキャスターを務めるなど、テレビ・ラジオで活躍。現在、ジャーナリストとして活動する一方、2004年から東京大学大学院総合文化研究科・人間の安全保障プログラム博士課程に在学中。「地球としごとをする人たち」（TOKYO FM出版）など著書多数。元国連大学上級コミュニケーション担当官。東京農業大学客員教授。06年4月3日に国連広報センター所長に就任。  
<http://www.ecostation.gr.jp/>



photos by Suto Naotoshi

#### 「安全保障」を単純化しない

環境ジャーナリストとして10年以上活動してきて、環境問題の中でも何か深く掘り下げて勉強したいと思っていたとき、「人間の安全保障」という言葉を聞いてこれだと思いました。冷戦時代は軍事的安全保障に注力されていましたが、それはある意味、安全保障を単純化していたと思います。しかし、安全保障の焦点を「人間」に当てると、多様な要素が絡み、もっと複雑になります。環境問題も、人間の営みから生まれてくるものなので非常に複雑です。その複雑さに取り組んでいく忍耐と体力が必要です。それが私たちのチャレンジだと思います。

確かにどこから手をつけるべきか難しいですが、逆に、糸口がたくさんあるとプラスの見方もできます。特に環境面から見て重要なのが「予防的措置」。問題が起こってからどうしようというのではなく、起きないように知恵を出し合い、対策を講じることです。

また、「change management」という変化をいかに管理するかが重視されています。例えば地球温暖化への取り組みには、温暖化を抑制しようとする「mitigation」と、すでに起こりつつある変化に適応する「adaptation」があります。中でも、起こり得る変化への問題処理能力を自ら高めようとする「proactive」な適応が、人間の安全保障にとっても大切です。

#### 大洋州の脆弱性を体感

1月に博士論文の研究のため、ツバル、フィジー、サモアに行き、首相から市民まで多くの方のお話を聞

きました。ちょうどツバルに滞在中、サイクロンが近くで発生し、暴風雨に襲われました。逃げる場所も手段もなく、その上、気象局のインターネットがダウンして情報が一時まったく入らなくなり、まさに孤立した脆弱な状態にある人々の恐怖を体感しました。

温暖化対策は、それを引き起こす先進国などの取り組みと同時に、その被害を受けている最も脆弱な人々の保護も重要です。また、気候変動で海面が上昇し、自然災害が増え、将来的に脆弱性が高まる可能性があります。このように、地球環境から人間の安全保障を見ると、私たちが起こした問題が遠く離れた人々に及ぼす影響や、今の世代だけでなく次の世代への影響など、時空を超えた視点で考えることが大切です。

そうした中で求められる国際協力は、人々が自分たちで身を守ることができるよう能力を強化する支援だと思います。現地でJICAの専門家やボランティアにもお会いしましたが、環境や気象の分野で優れたノウハウを持つ日本の支援は、人々を勇気づけています。また、私たちがそうした現場を見ることで、日本人の活動を誇りに思ったり、自分も何かできないかと考えたり、いろんなことに気付くでしょう。私自身、環境問題や途上国にかかわる以前は「国際的」「世界」という言葉を無意識に使っていましたが、今は途上国が含まれていなければ決して使いません。「欧米」「先進国」＝「世界」ではなく、途上国も含まれていて初めて「世界」と言えるのです。

これからも現場に足を運び、そこで活躍するさまざまな方にお会いしたいですね。